（資料）

ハーマン・メルヴィル作「ジョン・マー」試訳

大　島　由起子*

ジョン・マー

ジョン・マーは、母を知らず、アメリカにて前世紀末に生を享けた。少年の頃よりさまざまな国の船乗りとして世界を経巡ったが、キーウェスト沖で海賊にやられた傷がもとで陸に上がり、活発とはいかぬ暮らしが始まった。とはいえ、習い性となった放浪を、今度は陸で続けただけのこと。

ジョン・マーはあちこち移り住んだ。まずは帆作りを生業として港から港へ、そして冒険をしてみんと、ベンチ作り程度の大工として内陸を転々とした。そうこう大工をしているうち、当時はまだ辺境だった大草原で 1838 年頃に、遂に定住と相成った。ちょっとした樫林や、しごくわずかな小集落に丸太小屋が点在するような頃のこと。それが最近ともなれば、内陸の州としてはそこは中堅どころとなっているのだから驚きだ。この地で、彼は放浪をお終にして、結婚した。

間もなく、豊かなローム層の土地に移住者がうねる波のように幾度も押し寄せてきた。この者たちは顔色からわかるとおり肝臓がやられていた。ジョン・マーは若妻と幼子を一つ棺に入れた。自分の手で。そうしたささやかな儀式で

* 福岡大学人文学部教授

二人を土に戻した。大平原で小さな盛り土をもうひとつこしらえたわけだ。その墓は、今となっては想像で呼び起こすしかない、墳墓作りで知られている人種の作った盛り土からさほど離れてない所だった。かの人種は、奇妙な蛇の形をした段丘の共同墓地に陶芸や骨を残していた。

ジョン・マーは概ね物腰は誠実で物静かだった。肌浅黒く、眉毛の色も黒かった。だが、優しくもなれば輝くこともあり、険しくなることこそなかったが時として憂鬱を湛えてしまう、そんな瞳をしていた。天涯孤独なこの男は、一度愛すると容易にはよそに心を移せない性質だった。中年になったジョン・マーは、愛と家族の絆を感じさせてくれた唯一の愛しき者たちを抱く当地から離れまいと心に決める。ジョン・マーは、自分が建てた丸太小屋を、そこにありがたがって住む移住してきた一家族に使わせて、同居している。

ジョン・マーの悲しみは時の経過のおかげで幾分和らげられたものの、心は空ろなままだった。ここに骨を埋めるつもりだったので、周りの人と交わって、できることなら心の空虚も埋め、人々との隔たりも埋めたかったが、所詮、無駄だった。彼らとは魂の結びつきではなく、ただ同じ苦難に立ち向かうために必要な相互援助という程のものにすぎなかった。誰のせいというわけでもないが、彼は当地では場違いだったのである。

実際的な人たち同士は、現実生活という話題もあり、互いに打ち解け合える。しかし、人のことにつけ出来事につけ、人は現在のことのみを話したり、将来のことを思い巡らせたりするだけで事足りるわけではない。人は幾度も過去に立ち返らなくてはならぬもの。過去というものは共同体の共通遺産でもあり、そういった過去の共有があってはじめて、実際的な人は親交を深めることができるのである。

しかしジョン・マーの辿ってきた道は、あたりの開拓民たちの経歴とは違っていた。開拓農民は鋤を握って生きてきたし、ジョン・マーは船舵を握って生きてきたのだから。開拓民は似たもの同士としかまみえず、慣習しか知らない

とくる。ジョン・マーには、緯度も経度もはっきりしている当地のことが分かってきた。詮無いこととはいえ、開拓民の心の及ぶ範囲はあまりに狭く、思いやりの及ぶ範囲も自ずと限られていた。こうした移民集団は代々、土を耕してきたわけで、彼らの父たちにしても、大海原などは話で聞いたことがあるだけだった。さらに内陸に入ろうものなら、海原などは伝説のようなもので、ぼんやりとした噂程度にすぎない漠としたものにすぎなかった。

開拓民は実直だった。単調な苦難を生き抜いてきたからだ。道徳心からというよりは刻苦しなくてはならなかったから禁欲的であった。ほとんどの者は、偏狭ながら心底、敬虔であった。必要とあれば彼らなりに親切にもなった。しかし、ジョン・マーのように世に落ち着き先もなく暮らしてきた男は違った。ジョン・マーのような、心地よい港で昔ながらの夕べの気晴らしを供してくれる気ままな旅籠好きにとっては。船乗り仲間との交流に慣れていた男にとっては。そんな男にとって、この地には何かが決定的に欠けていた。言ってみれば、喜びから生まれるぬくもり、生の華だ。しつこいマラリアに耐えている働き者の開拓民ときたら、生まれつき生の華とは無縁だった。—— 休日がくるためしのない人々 —— 彼らは実直すぎて、芸術的でもなかったし、実生活を越えるものに心揺さぶられたいなどとは願っていなかった。それでも船乗りジョン・マーは孤独感を紛らわそうと、当地では最も楽しげな玉蜀黍の剥きに集まりに出て、日々の苦労から気を紛わせてあげようとしてみる。そして、自分の体験談や海原の風景のことを話し始めるが、誰も聞きたがろうとしてくれないので、すぐに止して黙りこむ。そんな皮剥きをしていたある日曜日のことだった。人に熱心に苦言を呈するタイプの年配の大工が、ジョン・マーに本音を告げた。「ここのわしらは、そうしたことはまったく知らんのだよ」と。

芸術の香りのない世界に暮らす仕事仲間からのそうした反応のなさ。そして、当時は機械もほとんど使わない、自然界そのものとさほど違わぬような彼らの農業。こうしたことは、ジョン・マーにとっては、今は滅亡した盛り土作りで

しられた民を除けば、後まで残る印を作ったものすらまだいないこの大草原では、自然界そのものの人間への無関心と重なった。

このあたり一帯の先住民の生き残りは、白人の正規軍との間に最近起こった、故郷奪回と自然権を求めて戦った壊滅戦争でほぼ絶滅し、赤い人はミシシッピー河からさほど遠くない荒野に追われていた。―― そこは当時、荒野だったが、今は州となり、地方自治体がある。以前には、原初からの大草原に、果てない戦線のように並んで草を食む幾多の野牛の群れが、流れるように来ていた。しかし、開拓農民とはおよそ異なった集団だが、その実、先駆けとなる狩人が到来すると、野牛は退き、数も減った。人間も動物もがこうして集団脱出すると、平原は砂漠みたいになってしまった。実に緑したたり花咲く草原だが、シベリアのオビのように殺伐とした。今、時折は、生い茂った草むらに潜んでいて驚いて飛び立ったプレーリー・ヘンや、頭上高くを飛び、渡りの季節には嵐雲を思わせるほど空を掻き曇らせる鳩たちが、いることはいる。だが普通は、下生えのある広い森とてないので、鳥は恐ろしく少ない。

かつては何時間も空漠とした静止が大平原を支配した。仲間のいない船乗りジョン・マーは「干上がった海底だ」と独りごちる。ジョン・マーは地理学者ではないにせよ、黄昏時には地平線まで続く沖積の広がる単調なうねりのことを考える。海原の孤独な相貌を常に生き生きとしたものにしてくれる、耳にも目にも訴えて来る動きがここにはないことをかこちながら。

とはいえ、馴染みのない大平原の光景が、なぜかひどく昔を思い出させるということもある。ジョン・マーは見渡す限りの地平線を見ていると海を想起した。

それに、この奥地に移ってくる前には、ジョン・マーは、奇妙に間をおきつつ、船乗り時代の仲間たちと少々文通したこともあったのだ。しかし、あたりの定住者同様、遠くの誰からも、いかなるものからも便りが途絶えてしまうと、彼は切り離されてしまった。波うつ草の向うから、縦帆式帆装が最後にもたし

たかもしれない、ちょっとした知らせを除けば、彼は天涯孤独となった。縦帆式帆装というのは、当時のこの地方での口語表現で、海ならぬ平原を横切っていく船の帆のような幌を高くアーチー状に掲げた、移民を乗せた幌馬車のことだ。あの頃はまだ郵便局とてなく、ひとけのない緑の道には頑丈な棒に粗末な革製蝶番を括り付けた程度の、鳥が止まる程度の郵便受けすらなかった。開拓民が間断なく到来し始めると苔むした記念碑となる程度の郵便受けのこと、つまり文明世界が更に拡がったことの証明のことだ。そんなものはなかった。今のアメリカは、アジアの岸辺を洗う大洋以外には西に国境などないと豪語する。大平原は、どこもかしこも人だらけの町になり、富裕農家が塀を巡らしている。—— 青白い町の人もかくしゃくとした農民も、最初にこの地に来た日焼けした定住者たちの血を汲む。半世紀前には人間の暮らしのために何も生まなかったような大平原が、今では世界の小麦地帯となっているのだから驚きだ。—— 鉄線とレールが巡らされている。だが、ジョン・マーの頃には道らしき道もなかった。点在する太さも形もさまざまな樫の林は、最近の定住によってますます離されて、道標程度になった。とはいえ、森がなくなったらなくなったで、遠くまで旅する者は太陽を目安に旅をした。初夏、次の簡単な野営地に着くのに丸一日かかるような頃の旅はずいぶんと航海のようだった。長く伸びる緑なす窪地は、凪の海原みたいに滑らかで、何日も前に遠くを襲ったハリケーンによるとんでもないうねりもそっと受けとめた。そうした窪地にいて海上の他船の帆くらいの遠くに幌馬車の幌が見えるとき、また新たな者たちが来るだろうという兆しを察知したものだった。馬車そのものは隠れていても、白く輝くカンバス地の帆がうっそうたる草木を抜けていくのが仄見えた。たとえ幌を見逃したにせよ、近くにいれば馬車が鬼百合より伸びた草の向こうから近づいてくるのを聞き分けた。

この荒野は豊穣である。しかしそこに暮らすジョン•マーにとっては、世界のどこにいてもおかしくはない友人たちは、目にも見えなければ、存在もしな

かった。

　ジョン・マーの船乗り仲間の皆が皆亡くなっているはずはなかった。しかし彼にとって、かつての仲間はもう亡霊も同然だった。環境ゆえにジョン・マーがますます昔日を回顧せざるをえなくなるにつれて、幻影たちは彼の妻子に次ぐ心の友となっていった。仲間たちは初めは朧だったが、遂には黙してはいても生きているかのようになっていった。幻影は、人がかつて愛したいかなる者をも包む輝き、想像力豊かな者が一緒にいたいと恋い憧れる対象を包むあの独特の輝きに照らされて、ジョン・マーの前に現れ出るようになった。

　ジョン・マーは、こうした姿を幻視で立ち現わす。あたかも幻が彼と何か話したがっているかのように、あるいは妄想が昂じて、彼らが黙していることを彼が責めるように ——

というのも、夜の当直見張りをしてると、お前らが現れる
どうしてお前らは、ここじゃそんなに黙りこくっているのさ
俺は大昔の当直仲間だぜ

なあ、あの頃あんたらは、海の闇もものせず
やたら声を張り上げた
嵐が歌うときに打って出て
嵐をものともせず嵐用の帆をすいすい揚げながら
「人生は嵐だ —— 荒れようぜ」なんて怒鳴ってよ
物事は定めだとやりすごし
人生に頓着せず
お前らは世界の大きさを測ったが
子供みたいに好き放題に生きてた ——

水面すれすれを飛んで、四つの海じゃあ
海燕で、陸にあがりゃ雲雀だ

ああ、俺の記憶から翔んでいってしまうな
役立たずになった旋律みたいに忘れちまったさ
音楽にあわせて、ますます傲慢にかきたてられる心のことは
いや、あんたはいつも俺の心にいたから古臭くなんてなりっこない
俺があんたらをまだ好きだから、あんたらは若いままさ
小さな入り江や小川に入ってくる潮みたいに
お前らは　俺をおとなう
顔また顔の海から泳ぎ来たり
異邦の　幾多の思い出を辿らせ
夢の中　俺を抱きしめにくる！

俺はお前らのように憧れる　だが、綱が張りつめて
切れて　分かれた筏同士だ　そんな俺たちは
またしっかり結ばれるだろうか
俺たちはひとつに絡まり一心同体だった　が引き裂かれた
次々と別の抱擁へと駆り立てられ
海原を放浪する海草よろしく！
でも、もうどこにも行かないっていうなら、どうかい
どさっと岸に打ち上げられてそこに留まるならさ
夜も更けゆく今みたいに
影のようなお前たちは　相変わらず俺のものだ
お前らがまわりを漂う　姿も顔も見える ——
刺青、耳飾り、耳の下で結んだ巻き毛のお下げをしてら

シンプルな本性のままの蛮人たち
現世に仕える現世離れしたものたち
そうとも、皆がいて、皆が俺には愛しい
影であっても　逆巻く中国の海でであっても

どこへ　どこへ　商船の船乗りたちよ
逆巻く突風のなか　どこへ行く
鯨の狩人どもは　まだ競ってる
どの短艇だったら巨鯨を追えるかい
戦艦の乗り組みら　どこへ行ってしまうのか
今　太鼓が船尾からやかましく鳴らさないなら
真夜中の荒波を渡る騒々しい音を立てぬなら ——
飛沫の向こうに　漠と現われるフォーマン
大して役にもたたぬのに下に光を射してやろうと
お前らの舷門明はまだ波を照らしているかい
輝く板が傾ぎ
死んだ仲間が闇に流されるのを見るとき

それにしても、装弾したキャンバス布でくくりつけられた鉄砲撃ちたちよ
もしお前らが下でまだ見張り続けるなら
「全員起床！」の声が
皆の睡魔に勝つことはない
ラッパも無駄だろう
そして轟く大砲が懇願する ——
心のこもった鼓動なら
鼓動、心臓の鼓動が皆を集める

集めるのさ。しかし手を握り締めて、引止めろ
皆にメインマストの揚げ綱のところで会うため ——
お前らの唱和をまた聞くためにさ！